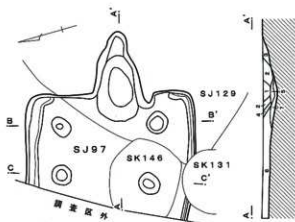


第105図 第96号住居跡・出土遺物

第81表 第96号住居跡出土遺物観察表

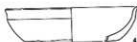
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 高台付碗	(12.4)	5.5	(6.4)	EHJ	良好	灰	20	カマド 器形の歪み大きい
2	須恵器 高台付碗	-	(3.3)	8.3	AEHJ	普通	にぶい楊	70	カマド 酸化焙焼成
3	土師器 坏	12.8	3.8	8.0	DEHJ	普通	にぶい橙	70	カマド
4	土師器 坏	12.6	3.7	7.0	EHJ	普通	楊	90	カマド
5	土師器 坏	(12.6)	(3.4)	-	ADEHJ	普通	にぶい赤楊	20	カマド
6	土師器 甕	(20.0)	25.5	3.6	ABDEHJ	普通	にぶい楊	40	カマド
7	鉄製品	残存長9.4cm	最大幅3.3cm	厚さ0.2cm	重さ38.7g			破片	用途不明品(刃物?)



- 第97号住居跡
- 1 明褐色土 焼土粒・ロームブロック多量
 - 2 暗灰褐色土 焼土粒・焼土ブロック多量
 - 3 暗茶褐色土 焼土粒多量
 - 4 茶褐色土 焼土ブロック多量
 - 5 暗褐色土 焼土多量
 - 6 暗灰褐色土 焼土粒・ローム粒・白色粒下を均一に含む
 - 7 暗褐色土 焼土粒多量



第106図 第97号住居跡・出土遺物



第82表 第97号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	(13.0)	(4.4)	-	EHJ	普通	灰	10	
2	須恵器 坏	(12.0)	(3.1)	-	EHJ	普通	灰	15	
3	須恵器 坏	-	(2.0)	(6.0)	HJ多	普通	灰	40	
4	土師器 坏	(14.0)	3.6	(10.0)	ABDEHJ	普通	にびい赤褐	10	

2.78mである。床面までほとんど削られていた。

主軸方向は、N-91°-Eを指す。

床面は全面に貼り床が施されていた。覆土の状況はわからない。壁溝は検出されなかった。ピットは複数検出された。西側の2基は柱穴の可能性があるが他はわからない。床下土壌はカマドの前に1基検出された。ロームブロックを多く含んだ暗褐色土で埋められていた。

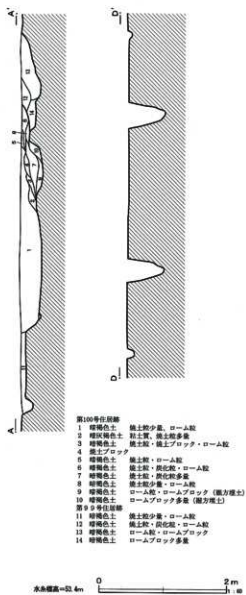
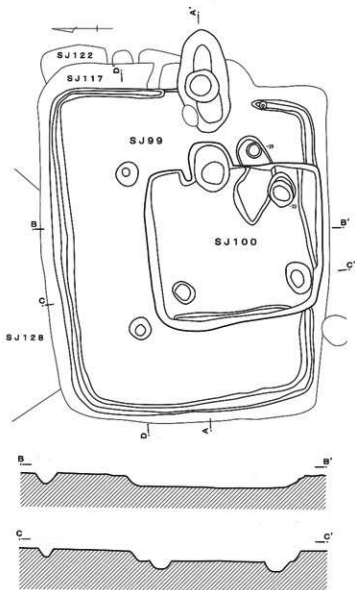
カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は土塊状に掘り込まれ壁外に出ているが、底面の高さも一定で煙道との区別がつかない。火床面は床面より低かったと考えられる。カマド内には、構築材と

して使われていたと考えられる片岩が散乱していた。また、カマド前にも大きめの片岩が見られた。袖は確認されなかった。

遺物は、片岩以外は出土しなかった。時期を推定できる遺物は出土しなかったが、住居跡の形態から9~10世紀頃と考えておきたい。

第93号住居跡 (第103図)

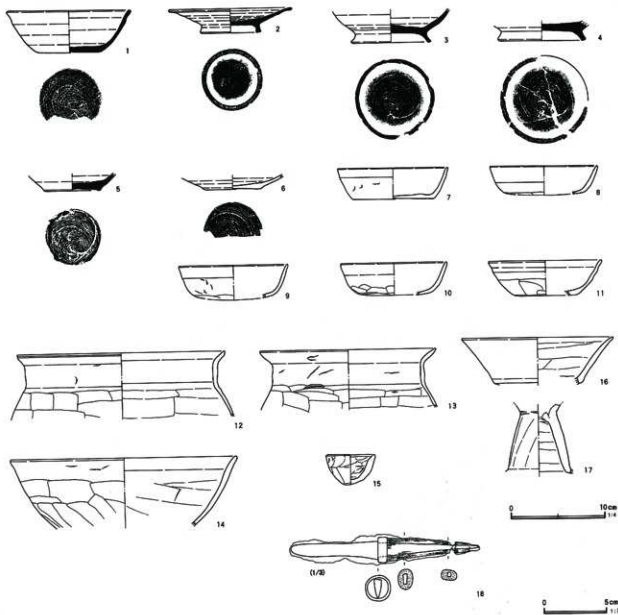
調査区の東側、X-57・58グリッドに位置する。第98号住居跡、第134号土壌と重複関係にある。第134号土壌より古い。第98号住居跡との関係は、当初本住居跡のほうが新しいと考えていたが、遺物を



第107図 第99・100号住居跡

第83表 第99・100号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	(13.2)	4.4	6.6	AEHJ	普通	灰	60	SJ99・100No.1
2	須恵器 高台付皿	(13.0)	2.6	6.4	EHJ	良好	灰	60	SJ100 やや歪みあり
3	須恵器 高台付碗	—	(3.5)	8.3	EHJ	良好	灰	70	SJ99No.5
4	須恵器 高台付碗	—	(2.0)	9.2	ABEHJ	普通	灰	90	SJ99・100No.3
5	須恵器 碗	—	(1.8)	6.0	AHJ	普通	にぶい黄褐色	70	SJ99
6	須恵器 皿	—	(1.5)	6.2	AEHJ	普通	にぶい黄褐色	40	SJ99 酸化焙焼成
7	土師器 坏	(11.6)	3.3	8.6	AEHJ	普通	にぶい橙	50	SJ99
8	土師器 坏	(11.6)	(3.0)	(8.6)	EHJ	不良	にぶい橙	30	SJ99カマド 磨耗著しい
9	土師器 坏	(11.6)	(3.4)	—	BEH	不良	橙	20	SJ99壁溝 磨耗著しい
10	土師器 坏	(11.0)	3.4	(8.0)	EHJ	普通	褐	15	SJ100
11	土師器 坏	(12.0)	3.6	(6.6)	AEH	普通	にぶい橙	30	SJ99
12	土師器 甕	(22.0)	(6.8)	—	ABEH	普通	にぶい橙	10	SJ99壁溝
13	土師器 甕	(18.6)	(6.2)	—	ABDEH	普通	にぶい赤褐	30	SJ99・100No.4
14	土師器 鉢	(24.0)	(7.3)	—	ABEH	普通	褐	10	SJ99カマド
15	手づくね土器	(5.2)	3.1	—	BDEH	普通	にぶい橙	60	SJ99
16	土師器 高坏	(16.0)	(4.9)	—	ABEHJ	不良	橙	30	SJ99 やや歪みあり
17	土師器 高坏	—	(7.2)	—	ABDEHJ	普通	にぶい赤褐	40	SJ99・100No.2
18	鉄製品	全長14.8cm 刀身長6.9cm 刃部幅1.5cm 緑金具直径2.0cm						破片	SJ99・100No.6 刀子 重さ75.2g



第108図 第99・100号住居跡出土遺物

見ると第98号住居跡の遺物のほうが新しい。出土遺物が極端に少なくこれだけで比較するには無理があるかもしれないが、第98号住居跡が新しい可能性もあると考え土層断面図には点線で立ち上がりを入れておいた。

平面形は歪んだ長方形である。規模は長軸5.14m、短軸3.32m、深さ0.12mである。主軸方向は、N-94°-Eを指す。

床面は貼り床状に踏み固められた感じで平坦である。壁溝は検出されなかった。ピットも確認されな

かった。カマド左側の壁は浅い段状になって張り出しているが、これが住居跡に伴う棚状の施設なのか、別遺構の重複なのかは確認できなかったがカマドを外していること、北側は住居跡の壁の延長上にあることから、住居跡に伴う施設の可能性が高いと考えられる。覆土は自然堆積である。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。第134号土壌が右側に重複しているが、カマド掘り方は土壌底面下に検出された。燃烧部は土塊状に掘り込まれ、壁から少し出ている。火床面は床面からだいぶ下が

っていたようである。床面とほぼ同じ高さには天井部の崩落土が堆積している。袖は確認されなかった。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は、第98号住居跡と一括であるが、土師器坏、須恵器坏などが少量出土している。図化できたのはわずかである。

第94号住居跡（第104図）

調査区の東端、W-58、X-58グリッドに位置する。他の遺構との重複はないが、東側は調査区域外にかかる。

平面形は長方形である。規模は長軸3.86m、短軸2.82m、深さ0.07mである。主軸方向は、N-100°-Eとなる。床面はほぼ平坦であるが住居跡中央部が踏み固められていた。壁溝はカマドのある東壁と南壁のカマド側を除いて廻っていた。ピットは検出されなかった。床下土壌は、カマドの右側を除く住

居跡の各隅に検出された。ローム混じりの黒褐色土で埋め戻されていた。また、東側の床下は、住居跡の掘り方と思われるが階段状に低くなっており、ロームブロックを多量に含む暗褐色土で埋められていた。

カマドは東壁に造られていたが先端は調査区外にかかっていた。燃焼部は住居跡の掘り方と同じ深さに掘られ、埋められている。火床面は床面と同じ高さである。袖は検出できなかった。

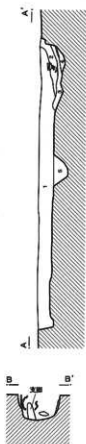
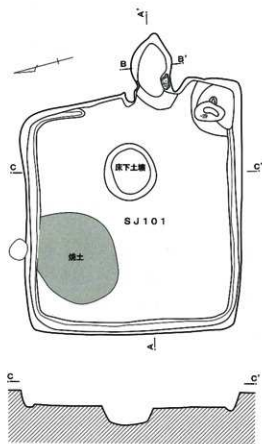
貯蔵穴はカマド右に検出された。

遺物は、土師器の坏・甕が出土している。

時期は9世紀前半である。

第95号住居跡（第96図）

調査区の中央、X-53グリッドに位置する。第86・199号住居跡と重複関係にあり、本住居跡が最も新しい。遺構の北側は調査区域外にかかる。

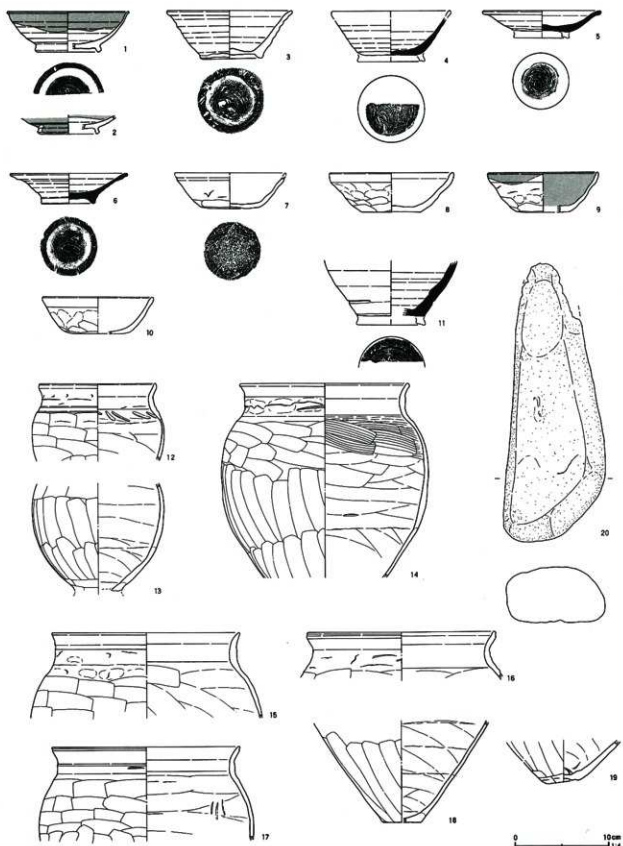


第101号住居跡

- 1 暗茶褐色土
ローム粒・燻土粒・磁土ブロック多量、暗褐色土ブロック少量
- 2 暗灰褐色土
磁土多量
- 3 増灰褐色土
燻土・炭化物多量
- 4 暗褐色土
磁土多量

水深調査=53.0m 0 2m

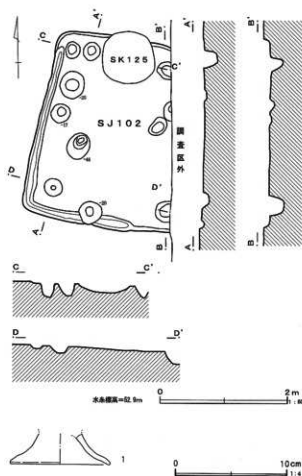
第109図 第101号住居跡



第110图 第101号住居跡出土遺物

第84表 第101号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	灰釉 碗	(12.8)	4.3	(7.0)	EH	良好	灰白	40	つけかけ ヘラキリ 東濃 大原 墨書か?
2	灰釉 皿	-	(1.9)	(6.0)	H	良好	灰白	15	ハケヌリ ヘラキリ 狼投 K-90
3	ロクロ 高台付碗	13.3	5.2	6.6	BDEHU	普通	にぶい黄	100	No. 8
4	須恵器 高台付坏	-	(3.9)	-	EHU	普通	灰	40	推定底径7cm
5	須恵器 高台付皿	12.6	(2.2)	(5.9)	EHU	普通	灰白	95	No. 1 高台部剥離
6	須恵器 高台付皿	12.5	3.3	5.7	EHU	普通	黒	100	No. 2
7	土師器 坏	-	(3.4)	6.2	BEHU	普通	にぶい赤褐	60	カマド
8	土師器 坏	(13.0)	4.1	(6.2)	ABDEHU	普通	にぶい赤褐	30	
9	土師器 坏	(13.6)	4.2	(5.6)	DEH	普通	にぶい赤褐	40	内外面一部黒色処理
10	土師器 坏	(11.6)	3.9	(7.0)	BEH	普通	赤褐	20	No. 3カマド 蓋み有り
11	須恵器 瓶	-	(5.8)	-	DEHU	普通	灰白	30	推定底径7cm
12	土師器 甕	(12.2)	(8.1)	-	ABEH	普通	にぶい赤褐	45	カマド
13	土師器 台付甕	-	(11.1)	-	ABEH	普通	にぶい赤褐	40	カマド
14	土師器 甕	17.8	(20.2)	-	ABDEHU	普通	にぶい赤褐	70	カマド No. 3・4
15	土師器 甕	(20.0)	(9.0)	-	ABDEHU	普通	にぶい橙	10	
16	土師器 甕	(20.0)	(5.0)	-	ABDEH	普通	にぶい赤褐	20	カマド
17	土師器 甕	(20.0)	(9.8)	-	ABDEH	普通	にぶい赤褐	60	カマド No. 4
18	土師器 甕	-	(10.6)	4.0	ABEH	普通	にぶい赤褐	20	カマド No. 4
19	土師器 甕	-	(4.5)	3.0	ABDEHU	普通	にぶい橙	60	カマド 蓋み大きい
20	支脚	残存長29.1cm	幅10.5cm	厚さ5.8cm			重さ2,831g	90	カマド No. 6



第111図 第102号住居跡・出土遺物

第85表 第102号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 台付甕	-	(2.7)	(8.8)	ADEH	普通	にぶい橙	15	

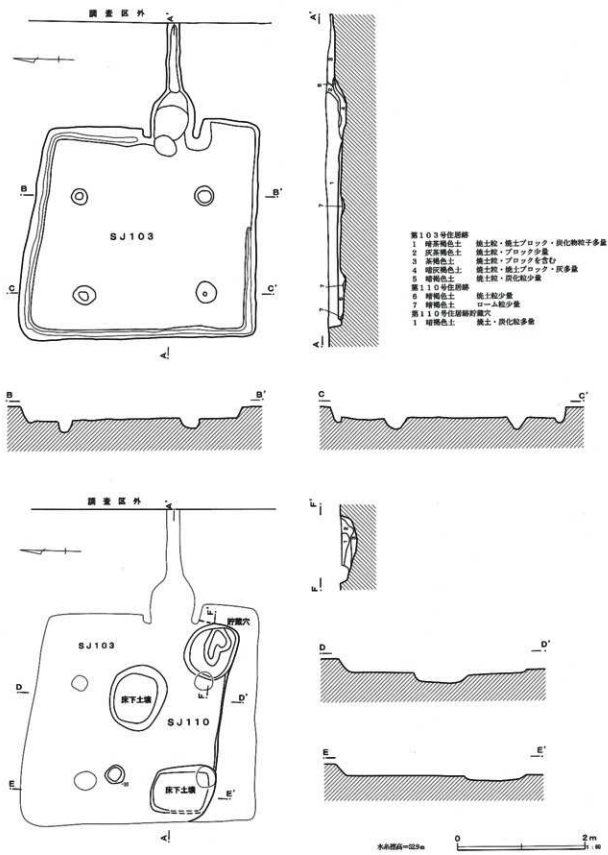
平面形は不明であるが、方形であろうか。規模は東西方向3.32m、南北方向は1.96m 検出された。深さ0.3mである。主軸方向は、N-77°-Eとなる。

床面は平坦である。壁溝は検出された範囲では廻っている。おそらく全周するものと思われる。ピットは住居跡の南隅に1基検出されたが、柱穴かどうか断定できなかった。

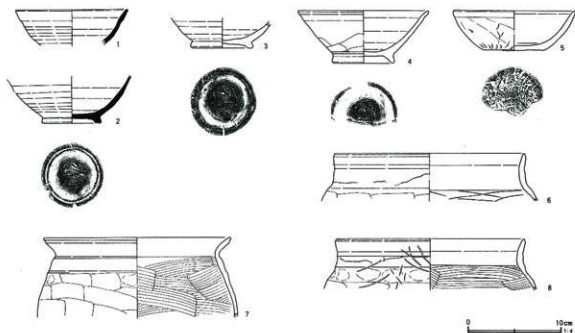
カマドは東壁に造られていた。壁をわずかに掘り込んでいる。掘り方を軽く埋めた後火床面としている。火床面は床面より低く、しっかりした灰層が残っていた。やや奥には支脚が残されていた。袖はきちんとした形では残っていなかったが、カマド周囲に白色粘土が散布していた。この粘土を使ってカマド上部を構築していたと考えられる。

貯蔵穴はカマド右に掘り込まれていた。大きさは80cm×60cmの楕円形で、深さは約20cmであった。

遺物は、土師器の坏・甕・台付甕、須恵器の碗や羽釜などが出土している。時期は10世紀である。



第112図 第103・110号住居跡



第113図 第103・110号住居跡出土遺物

第86表 第103・110号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	(12.0)	(3.8)	—	EHU	良好	灰	15	SJ110 貯穴
2	須恵器 高台付碗	—	(5.0)	6.3	EHU	良好	黄灰	80	SJ103 No.1
3	ロクロ 高台付碗	—	(3.2)	6.7	AEHU	普通	にぶい褐	70	SJ110 貯穴
4	ロクロ 高台付碗	(14.0)	5.5	6.5	ABEH	普通	にぶい褐	30	SJ103
5	土師器 坏	(12.8)	4.2	6.6	ABEH	普通	橙	30	SJ103
6	土師器 甕	(18.0)	(5.0)	—	BDEHU	不良	にぶい褐	25	SJ103 カマド
7	土師器 甕	(20.0)	(8.4)	—	ABDEHU	普通	にぶい赤褐	20	SJ110 貯穴
8	土師器 甕	(20.0)	(5.4)	—	ABDHU	普通	にぶい赤褐	45	SJ103 カマド

第96号住居跡 (第105図)

調査区の北東側、V-56・57グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。西側は調査区外にかかる。

平面形は長方形と推定される。規模は東西方向が2.52m 検出された。南北方向は2.78mである。深さは0.09mである。主軸方向はN-104°-Eを指す。

床面は平坦で、壁溝はカマドの右側を除いて廻っているようである。ピットは3基検出された。いずれもやや浅く壁際によっているが柱穴になるものと考えられる。覆土は自然堆積である。床下土壌は1基検出された。120cm×106cmの不整形円で深さは5cmであった。

カマドは東壁のやや南寄りに造られていた。燃焼部は土壌状に掘り込まれ、壁から突出している。掘

り方底面はほとんど下がらず直接火床面としている。火床面は床面とはほぼ同じ高さである。袖は確認できなかった。

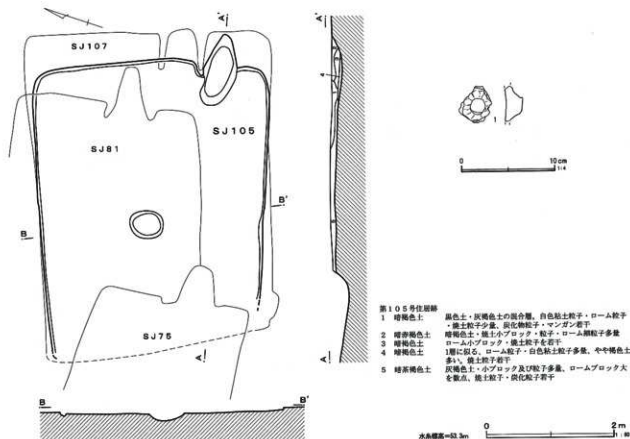
遺物は、土師器の坏・甕、須恵器高台付碗が出土している。

時期は9世紀後半である。

第97号住居跡 (第106図)

調査区の北東側、V-56グリッドに位置する。第129号住居跡、第131・146号土壌と重複関係にあり、第131号土壌より古く、第129号住居跡、第146号土壌より新しい。西側は調査区外にかかる。

平面形は長方形と推定される。検出されたのは南北方向が2.72mで、東西方向は2.04mまで確認し



第114図 第105号住居跡・出土遺物

第87表 第105号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 甌	-	(3.7)	-	ABEHU	普通	にぶい赤褐	破片	把手部分のみ

た。深さは0.09mである。主軸方向は、N-109°-Eを指す。

床面は平坦で、壁溝はカマドの両側以外は廻っているようである。ピットは4基検出された。柱穴の可能性がある。

カマドは東壁のやや南寄りに造られていた。壁を掘り込み壁外に張り出している。掘り方は土壊状というよりは皿状で緩やかである。火床面は床面と同じ高さであり、天井崩壊土が顕著に見られた。袖は右袖が残っていたが残りが悪く短い。

遺物は、土師器坏、須恵器坏が出土した。時期は9世紀前半としておきたい。

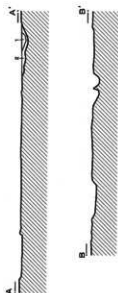
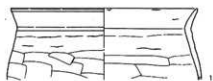
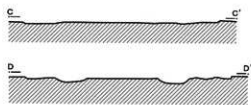
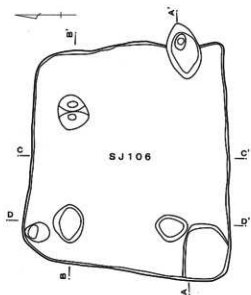
第98号住居跡 (第103図)

調査区の東側、X-57グリッドに位置する。第93号住居跡と重複関係にある。第93号住居跡といっしょに掘り下げてしまったため残存状態はよくなく、深さもほとんどない。第93号住居跡の項で述べたとおり重複関係が不明確な所がある。

平面形は長方形である。規模は長軸2.44m、短軸1.98mである。主軸方向は、N-100°-Eを指す。

床面は、中央部に硬化面が現れた。壁溝はなかった。ピットも検出されなかった。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。土壊状の掘り込みの底面が検出された。燃焼部は壁を掘り込んで外側に出ていた。カマドの前面には硬化面に続くまで焼土が残っていた。



第106号住居跡
1 埴輪色土 焼土・ブロック・灰色粘土・炭化灰少量
2 埴輪色土 焼土灰少量、ローム紙・ブロック含む

床面標高=53.2m



第115図 第106号住居跡・出土遺物

第88表 第106号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 甕	(20.0)	(7.5)	-	BDEHJ	普通	にぶい褐	15	カマド
2	須恵器 甕	-	-	-	EHJ	良好	灰	破片	

遺物は、第93号住居跡と一括であるが、土師器坏などが出土している。時期は8世紀前半である。

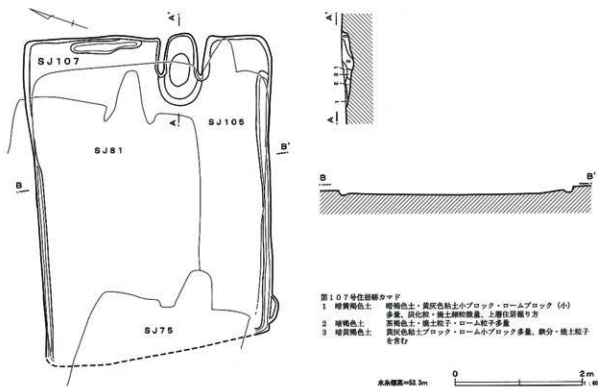
第99号住居跡 (第107図)

調査区の中央、Z-50グリッドに位置する。第100・117・122・128号住居跡と重複関係にあり、第100号住居跡より古く、他の住居跡より新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸5.20m、短軸4.22mである。主軸方向は、N-86°-Eを指す。

床面まで削平されておりほとんど壁はない。壁溝は全周する。ピットは3基検出された。北側の2基は60cmほどの深さがあり柱穴と思われる。

カマドは東壁のやや南寄りに造られていた。燃焼部は、土塊状に掘り込まれ張り出している。上部は



第116図 第107号住居跡

第100号住居跡のカマドが重複しており、天井部の崩落土等は不明である。袖は確認できなかった。柱穴と考えられるものは確認できなかった。

遺物は、第100号住居跡と一括であるが、16・17は混入である。15も混入と思われる。時期は9世紀前半であろうか。

第100号住居跡 (第107図)

調査区の中央、X-57グリッドに位置する。第99・117・122・128号住居跡と重複関係にあり、最も新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸2.80m、短軸2.40m、深さ0.15mである。主軸方向は、N-87°-Eを指す。

床面は平坦で、壁溝は西壁際に認められた。ピットは3基検出された。いずれも15cm前後と浅いが柱穴の可能性はあると思われる。床下土壌はカマド右側に検出された。深さは10cm程度である。

カマドは東壁の北寄りに造られていた。燃焼部は

土塊状に掘り込まれ、突出している。火床面は床面よりやや低い。袖は左袖が確認された。長さ20cmと短い袖である。

貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は、第99号住居跡と一括であるが、土師器の坏・甕、須恵器の坏が出土している。2・10が本住居跡に伴うと考えられる。金属製品では、刀子が出ている。

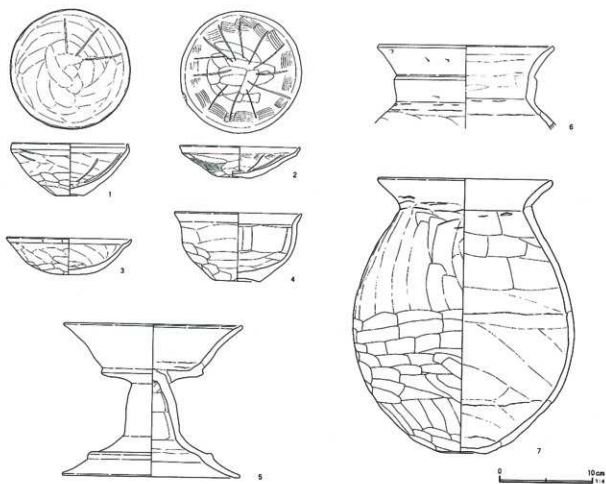
時期は9世紀後半と考えておきたい。

第101号住居跡 (第109図)

調査区の北東側、V-57、W-57グリッドに位置する。他の遺構との重複はない。

平面形は長方形である。規模は長軸4.00m、短軸3.52m、深さ0.24mである。主軸方向は、N-104°-Eを指す。

床面は平坦で、壁溝はカマドの脇を除いて全周する。覆土は自然堆積と思われる。柱穴と考えられるものは確認できなかった。床下土壌は、大きき90cm



第117図 第107号住居跡出土遺物

第89表 第107号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	12.2	5.5	3.1	BDH	普通	明褐色	100	No. 5 内面ヘラミガキ (3本確認)
2	土師器 皿	12.8	3.4	3.4	ABDEH	普通	橙	100	No. 1 内面ヘラケズリ後ヘラミガキ
3	土師器 坏	13.3	3.8	-	ABEH	普通	橙	100	No. 9 内面やや磨耗する
4	土師器 鉢	13.5	7.2	5.0	BDHJ	普通	明赤褐色	100	No. 6
5	土師器 高坏	(19.0)	16.1	18.9	ABDEHJ	不良	橙	70	No. 8 磨耗著しい
6	土師器 壺	18.4	(8.7)	-	ABEHJ	普通	にぶい赤褐色	90	No. 3
7	土師器 甕	18.2	28.9	5.8	AHJ	不良	にぶい橙	80	No. 2, No. 4, No. 7

×80cm、深さ30cmで埋め戻されていた。

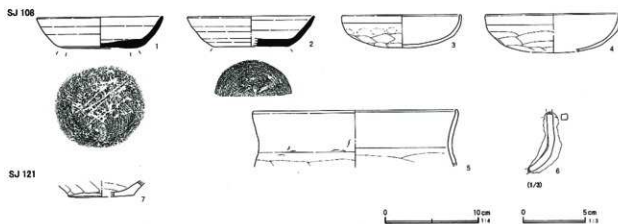
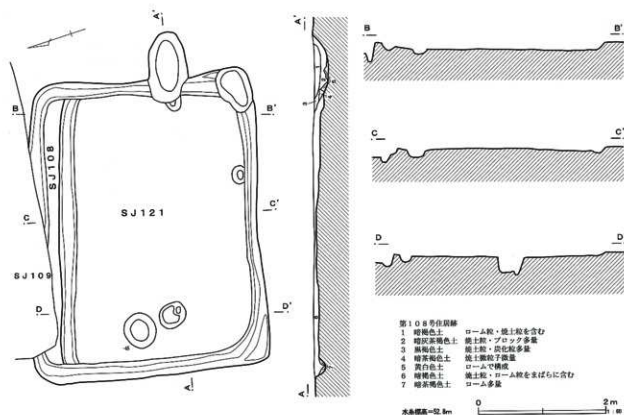
カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は土壌状に掘り込まれ、壁外に突出している。火床面は床面とほぼ同じ高さである。袖は両側で検出されたが左右とも短い。袖の内側には両袖とも補強材として片岩が使用されていた。カマド内からは甕が支脚にかけられたままつぶれた状態で出土した。貯蔵穴はカマドの右側にあり、長径80cm、短径70cmである。

遺物は、土師器の坏・台付甕・甕、須恵器の高台付坏、灰釉陶器の碗などが出土している。時期は10世紀である。

第102号住居跡 (第111図)

調査区の北東側、V-58、W-58グリッドに位置する。第125号土壌と重複関係にあり、これより古い。東側は調査区外に出る。

平面形は長方形と推定される。検出されたのは南



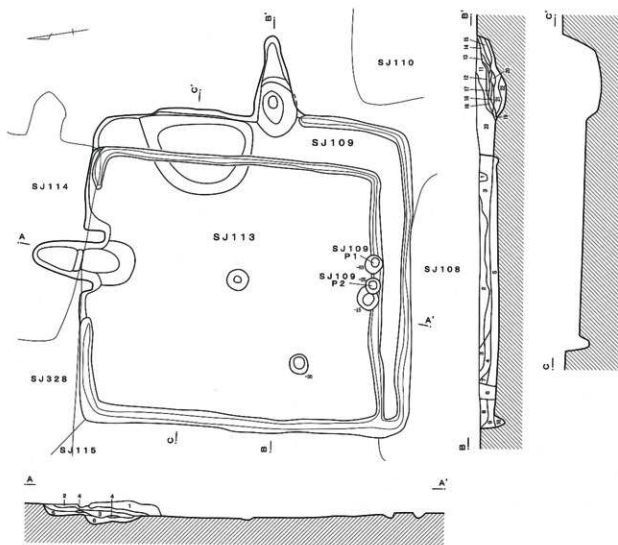
第118図 第108・121号住居跡・出土遺物

第90表 第108号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	(13.6)	3.3	8.5	EHJ	不良	灰	60	No.3 底部磨耗著しい
2	須恵器 坏	(13.6)	3.2	(8.2)	ADEHJ	良好	灰黄	40	No.4
3	土師器 坏	12.6	3.5	-	ABDEHJ	普通	にぶい橙	70	No.2
4	土師器 坏	(14.0)	(4.0)	-	DEH	普通	橙	25	No.1
5	土師器 甕	(22.0)	(6.0)	-	BDEH	普通	橙	10	カマド
6	鉄製品	残存長4.70cm 断面一辺0.5cm 重さ15.3g		-	-	-	-	破片	棒状不明品

第91表 第121号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
7	土師器 甕	-	(1.6)	(7.0)	BDEH	普通	にぶい黄褐	15	壁溝内



第109・113号住居跡

- 1 埴輪色土 ローム多量、焼土粒少量
- 2 埴輪色土 (口縁よりやや内側)、ローム粒・焼土粒・白色粒子多量
- 3 埴輪色土 ローム粒・焼土粒・焼土ブロック・白色粒子多量
- 4 埴輪色土 ローム粒を含む
- 5 埴輪色土 焼土粒・ブロック多量、灰褐色ブロックを含む
- 6 埴輪色土 ローム粒を含む
- 7 埴輪色土 ローム粒を塊状に含む
- 8 埴輪色土 ローム粒多量
- 9 埴輪色土 ローム粒を含む
- 10 埴輪色土 焼土粒を含む
- 11 灰白色土 焼土粒・焼土ブロックを含む

- 12 焼土層 焼土ブロック多量
- 13 埴輪色土 焼土粒多量
- 14 灰褐色色土 焼土粒・焼土ブロック多量
- 15 埴輪色土 灰白色土ブロック少量
- 16 灰化層 焼土粒少量
- 17 灰褐色色土 焼土粒少量
- 18 灰褐色色土 焼土ブロック少量、ボンボン
- 19 灰褐色色土 焼土粒・灰化粒を含む
- 20 灰白色土 炭入物を含まず少ない
- 21 埴輪色土 焼土ブロック・焼土粒多量
- 22 埴輪色土 焼土粒を含む
- 23 埴輪色土 ローム粒・焼土粒を含む (口縁より少ない)

第113号住居跡カマド

- 1 灰色粘質 焼土粒・埴輪色粒・ブロック少量
- 2 埴輪色土 灰褐色質上・焼土粒少量、炭物含む
- 3 埴輪色土 焼土ブロック・灰化粒多量
- 4 灰層
- 5 埴輪色土 やや中質、焼土粒少量 (窪地掘り方)
- 6 土ごたれ埴輪色土 ロームブロック多量、焼土粒少量 (カマド掘り方上)

水平距離=10m
0 2m

第119図 第109・113号住居跡

北方向3.04m、東西方向は2.32mである。深さは0.08mである。主軸方向は、N-13°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁溝は西辺と南辺の途中まで検出された。ピットは壁際を中心に複数検出されたが、すべてが本住居跡に伴うかどうかかわからない。主柱穴も特定できなかった。

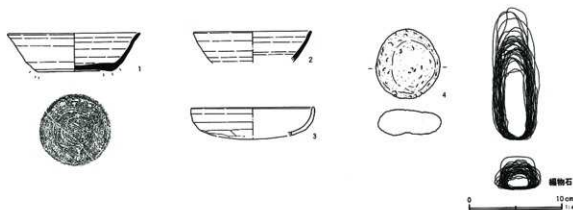
カマドは検出できなかった。おそらく調査区外の東壁に造られていると考えられる。

遺物は、土師器の台付壺の台部が出土している。時期はよくわからないが9世紀であろう。

第103号住居跡 (第112図)

調査区の北東側、U-58、V-58グリッドに位置する。第110号住居跡と重複関係にあり、本住居跡は第110号住居跡を拡張したものである。

平面形は歪んだ方形である。規模は長軸3.76m、



第120図 第109号住居跡出土遺物

第92表 第109号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	14.2 (12.6)	4.0 (3.3)	7.8	EHU	良好	灰白	75	No. 6・10
2	須恵器 坏			-	FHU	良好	灰	30	No. 10・16 南比企産
3	土師器 坏	(13.0)	(3.0)	-	ADEH	普通	橙	20	
4	擦り石	長さ6.8cm 幅7.3cm 厚さ2.7cm 重さ93.8g						100	

第93表 第109号住居跡出土編物石計測表

番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	残存	備考・出土位置	番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	残存	備考・出土位置
5	9.6	4.5	2.7	192.6	片岩	100	No. 1	23	10.5	3.8	2.8	159.9	片岩	100	No. 25
6	9.6	3.4	2.5	143.8	砂岩	100	No. 2	24	13.2	5.0	2.4	212.6	片岩	100	No. 26
7	10.5	4.6	1.6	90.9	片岩	100	No. 3	25	10.8	3.5	2.5	128.3	砂岩	100	No. 27
8	10.8	3.9	1.8	111.6	片岩	100	No. 4	26	(11.2)	2.8	1.7	71.3	片岩	90	No. 24・28
9	11.7	3.3	3.0	172.6	片岩	100	No. 7	27	8.6	3.1	1.9	65.8	砂岩	100	No. 29
10	10.5	2.3	1.6	90.0	片岩	100	No. 9	28	9.4	3.5	1.4	56.5	片岩	100	No. 30
11	13.8	3.2	1.9	143.3	片岩	100	No. 11	29	9.5	3.5	2.5	114.6	片岩	100	No. 31
12	8.6	3.0	2.4	112.7	片岩	100	No. 12	30	12.8	4.2	2.8	222.1	片岩	100	No. 32
13	9.4	4.2	1.9	109.5	片岩	100	No. 13	31	9.2	3.7	1.8	87.9	片岩	100	No. 33
14	11.5	3.7	2.3	164.0	片岩	100	No. 14	32	11.4	3.9	2.3	104.4	片岩	95	No. 34
15	13.4	3.5	1.8	116.4	片岩	100	No. 18	33	10.2	3.8	3.4	213.6	砂岩	100	No. 35
16	9.6	2.8	2.3	111.5	片岩	100	No. 17	34	10.8	4.0	1.9	112.4	片岩	100	
17	8.3	3.2	2.3	86.5	砂岩	100	No. 19	35	8.5	2.7	2.0	75.4	片岩	100	
18	7.4	2.4	2.0	53.7	片岩	100	No. 20	36	8.8	3.6	1.1	61.6	片岩	100	
19	10.0	3.8	1.9	128.0	片岩	100	No. 21	37	(8.2)	4.7	2.5	133.1	片岩	60	No. 25
20	7.3	3.0	2.3	78.5	片岩	100	No. 21	38	(5.9)	1.4	0.9	11.0	片岩	20	No. 8
21	10.2	4.2	1.8	109.2	片岩	100	No. 22	39	10.2	(2.3)	1.8	65.5	砂岩	80	
22	10.4	3.6	1.9	114.5	片岩	100	No. 23								

短軸3.44m、深さ0.16mである。主軸方向は、N-93°-Eを指す。

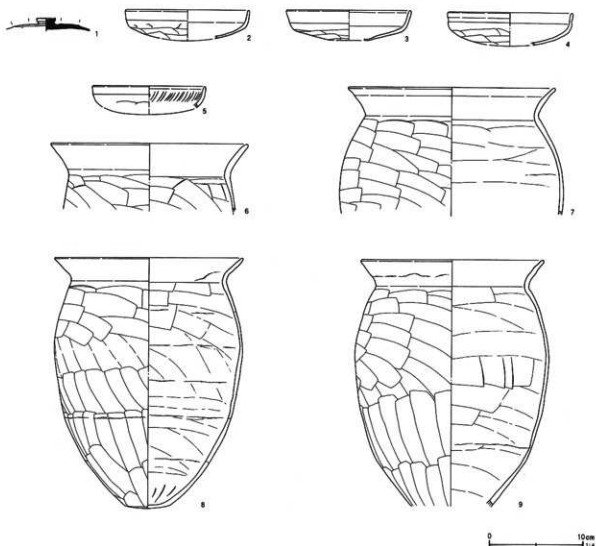
床面は平坦である。第110号住居跡の部分を暗褐色土で埋めて貼り床状にしている。壁溝は南東隅を除いて廻っていた。ピットは4基検出された。主柱穴と考えられる。覆土は自然堆積である。カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は土塊状に掘り込まれ、壁外に50cmほど突出している。さらにその先は浅い段となり煙道となって1m以上延びて調査区外に出ている。火床面は床面とほぼ同じかや

や低い。4層は灰層である。袖は両側で確認された。灰白色粘土で造られている。貯蔵穴は確認されなかった。

遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の高台付碗が出土している。時期は10世紀である。

第104号住居跡 (第78図)

調査区の中央、Y-51グリッドに位置する。第69・88号住居跡と重複関係にあり、いずれよりも新しい。



第121図 第113号住居跡出土遺物

第94表 第113号住居跡出土遺物観察表

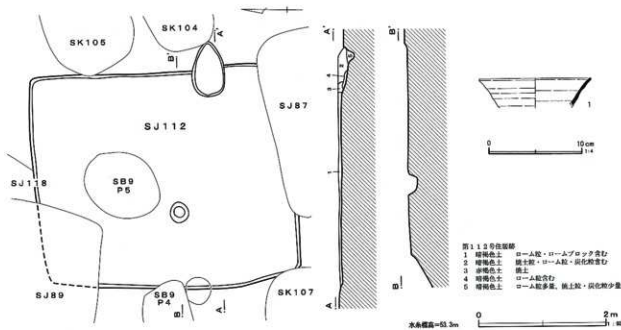
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 蓋	-	(1.4)	-	EPHJ	普通	灰白	80	No. 10 つまみ径1.9cm
2	土師器 坏	(13.0)	(3.0)	-	ABDEH	普通	にぶい橙	20	カマド
3	土師器 坏	(13.0)	3.2	-	ABDEH	普通	にぶい橙	20	Pit 1
4	土師器 坏	(13.0)	(3.4)	-	BDEH	普通	橙	15	カマド
5	土師器 坏	(12.0)	(2.3)	-	ADEH	普通	明赤褐	15	内面暗文
6	土師器 壺	(21.0)	(7.4)	-	ABDEH	普通	にぶい橙	20	No. 2
7	土師器 壺	(22.0)	(13.3)	-	ABDEH	普通	にぶい赤褐	30	No. 4 内外面やや磨耗
8	土師器 壺	(20.0)	26.1	4.6	ABDEH	不良	橙	40	No. 3, カマド
9	土師器 壺	(19.4)	(25.8)	-	ABDEH	普通	にぶい褐	65	No. 5, カマド

平面形は南辺が長く、北辺が短い台形を呈する。
規模は長軸4.38m、短軸2.80m、深さ0.05mである。
主軸方向は、N-91°-Eを指す。

床面は平坦で、壁溝はなかった。ピットは検出されなかったが、カマドの反対側の壁際に土塊状の掘

り込みが1基検出された。住居跡中央に30cmほどの範囲で焼土が検出された。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は土塊状に掘り込まれ、突出している。袖は確認されなかった。



第122図 第112号住居跡・出土遺物

第95表 第112号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須臾器 坏	(12.0)	(3.1)	-	EH	良好	灰	10	カマド

遺物は、土器は出土しなかったが埴輪片、土錘のほか碟が床面からまともに出て出土した。時期を推定できる遺物はないが9～10世紀であろうか。

第105号住居跡 (第114図)

調査区の中央、Y-50グリッドに位置する。第75・81・107号住居跡と重複関係にあり、第75・81号住居跡より古く、第107号住居跡より新しいと考えられる。

平面形は長方形と推定される。規模は、長軸は4.46 mまで確認でき、短軸は3.76 mである。深さは0.07 mである。主軸方向は、N-66°-Eを指す。

床面は平坦で、壁溝はなかった。ピットは1基検出された。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は浅い土壇状に掘り込まれ、壁外に突出している。火床面は床面とほぼ同じ高さと考えられる。袖は左袖がわずかに残っていた。

遺物は、ほとんど出土しなかった。第107号住居

跡と一括であるが、甌の把手が図示できた。時期は不明である。

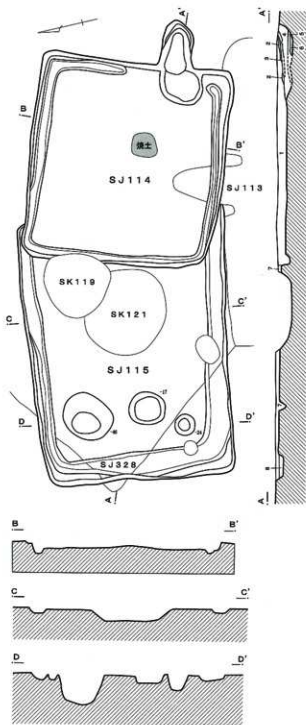
第106号住居跡 (第115図)

調査区の東側、X-55・56グリッドに位置する。他の遺構との直接的な重複関係はない。

平面形は基本的には長方形と思われるが、南辺が長く北辺が短い台形を呈する。規模は長軸3.76m、短軸3.28m。主軸方向は、N-91°-Eを指す。

ほとんど床面まで削られているため、床面の状態はわからない。壁溝はないようである。ピットは4基検出されたが、いずれも浅く柱穴とは断定できない。カマドの反対側の壁際に、ごく浅い土壇状の掘り込みが1基検出された。覆土の状態もよくなかったため床下土壇ではないかと思われる。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、燃焼部の半分ほど壁外に出ている。火床面は床面よりやや低かったのではないかと思われる。灰色の粘土が落ち込んでいることから、



第114号住居跡

- 1 緑褐色土 粘土粒含む、ローム粒少量
- 2 粘土
- 3 灰層
- 4 暗褐色土 粘土ブロック少量、ローム粒多量
- 5 暗茶褐色土 粘土粒・ブロック多量
- 6 暗茶褐色土 粘土粒少量、ローム粒多量
- 第115号住居跡
- 7 暗褐色土 ローム粒含む、粘土粒少量
- 8 暗褐色土 ローム粒含む

本画縦高=2m



第123図 第114・115号住居跡

構築材には他の住居と同じように白色粘土が使われていたと考えられる。袖は確認されなかった。

遺物は、土師器の甕、須恵器の甕の胴部破片が出土した。

時期は10世紀であろう。

第107号住居跡（第116図）

調査区の中央、Y-50グリッドに位置する。第75・81・105号住居跡と重複関係にあり、いずれよりも古い。

平面形は長方形を呈する。規模は長軸約5.2mと推定され、短軸は3.74mである。深さは0.07mである。主軸方向は、N-68°-Eを指す。

各住居跡の重複によって床面の状況はよくない。壁溝は北壁の西側部分と、南壁の東角を除いた部分、それに東壁のカマドの左側の一部に薄く検出されたのが該当すると考えられる。ピットは検出されなかった。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は壁内に取まっている。袖は両袖とも確認された。第105号住居跡と重複しているが、遺物は本住居跡に伴うというのが調査時の所見である。土師器の坏・高坏・壺・甕が出土した。出土位置は第75・81号住居跡と重複しない住居跡南側の床面である。

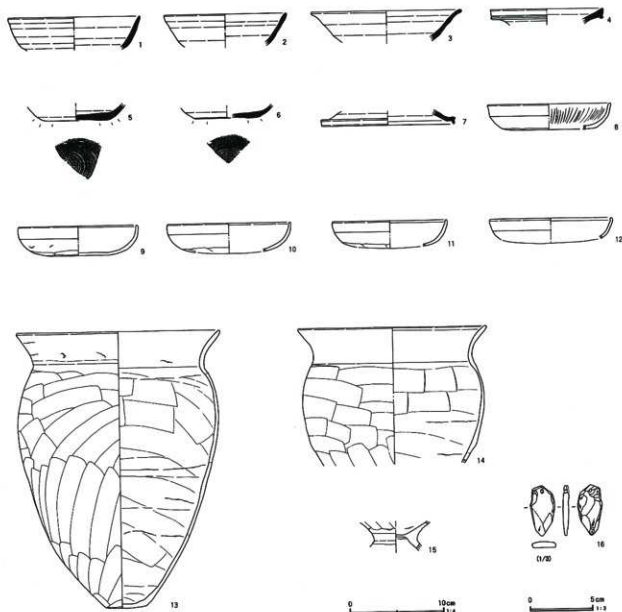
時期は5世紀である。

第108号住居跡（第118図）

調査区の北東側、U-57、V-57グリッドに位置する。第109・121号住居跡と重複関係にある。本住居跡は第121号住居跡を拡張したものであり、第109号住居跡よりは古い。

平面形は長方形である。規模は長軸4.78m、短軸3.64mである。主軸方向は、N-108°-Eを指す。

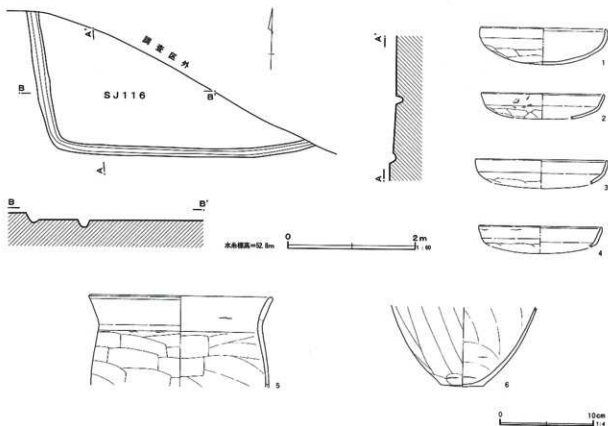
床面まで削平されていたため貼床が出てしまっていた。壁溝は全周する。ピットはカマドの反対側の壁際に2基検出された。ピットも立替に伴って掘り直されているとすれば、位置的にみて北側のピット



第124図 第114・115号住居跡出土遺物

第96表 第114・115号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	(14.0)	(3.5)	—	EH	普通	灰	15	SJ114
2	須恵器 坏	(13.0)	(3.4)	—	DEH	普通	灰白	15	SJ114
3	須恵器 碗	(16.0)	(3.3)	—	BEHJ	普通	灰黄	15	SJ115
4	須恵器 長頸瓶	(12.0)	(1.7)	—	EH	普通	灰	10	SJ114
5	須恵器 坏	—	(1.8)	(7.2)	EH	良好	灰	20	SJ114
6	須恵器 坏	—	(1.3)	(7.0)	EFH	良好	灰	20	SJ114カマド 南比企産
7	須恵器 蓋	(14.0)	(1.5)	—	EH	普通	灰	15	SJ114
8	土師器 坏	(13.0)	2.7	(10.0)	ABEH	普通	にぶい赤褐	10	SJ114 内面放射状暗文
9	土師器 坏	(12.6)	3.1	—	ABDEH	普通	明赤褐	40	SJ114
10	土師器 坏	(13.0)	(3.0)	—	BDEH	普通	にぶい黄橙	30	SJ114
11	土師器 坏	(12.0)	(2.7)	—	ABDEH	普通	橙	15	SJ114 やや磨耗
12	土師器 坏	(12.8)	(2.2)	—	BDEH	普通	にぶい黄橙	15	SJ114
13	土師器 甕	21.6	28.9	4.5	ABEHJ	普通	にぶい赤褐	85	SJ114・115No. 1~カマド No. 5
14	土師器 甕	(20.0)	(14.4)	—	ABDEH	普通	明赤褐	15	SJ114・115No. 1
15	土師器 台付甕	—	(3.0)	—	ABEHJ	普通	にぶい褐	60	SJ114 くびれ径4.5cm
16	石製横造品	長 \approx 3.9cm	幅1.9cm	厚 \approx 0.5cm	重 \approx 5.3g		灰白	90	SJ114



第125図 第116号住居跡・出土遺物

第97表 第116号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(13.2)	3.9	-	DEH	普通	褐	50	
2	土師器 坏	(13.0)	(2.6)	-	BDEH	普通	にぶい橙	10	歪み大きい
3	土師器 坏	(14.0)	(2.5)	-	DEH	普通	にぶい橙	15	やや歪み有り
4	土師器 坏	(13.0)	(2.1)	-	DEH	普通	にぶい橙	50	
5	土師器 甕	(19.4)	(9.6)	-	BDEH	普通	橙	15	歪み大きい
6	土師器 甕	-	(8.5)	4.5	ADEH	普通	にぶい黄橙	20	

が本住居跡に伴う可能性が高いと考えられる。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。第121号住居跡のカマドの上に重複して造ったか、あるいはそのままに近い状態で使ったと考えられる。燃烧部は土塊状に掘り込まれ、壁外に突出している。火床面は床面より低い。袖は確認されなかった。

遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の坏が出土した。時期は8世紀初～前半であろう。

第109号住居跡 (第119図)

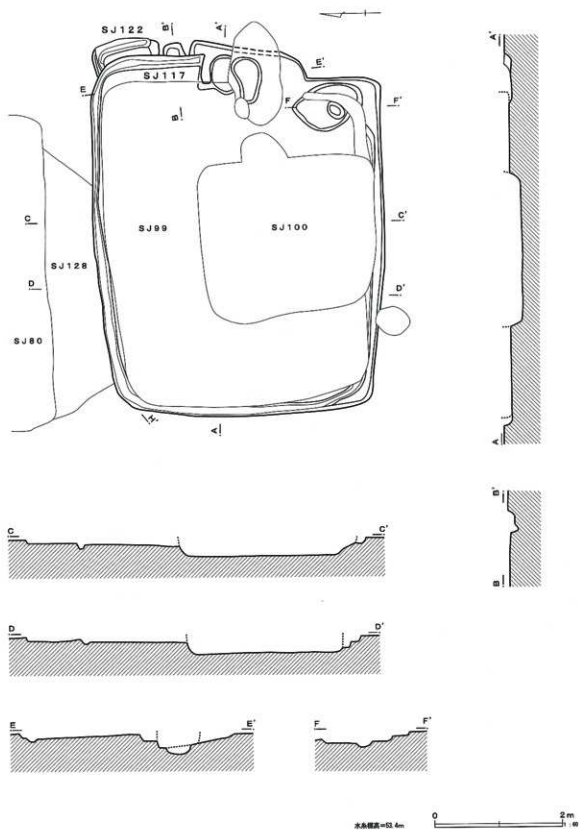
調査区の北東側、U-57・58、V-57・58グリッドに位置する。第108・113・114・115・328号住居

跡と重複関係にある。第108・121号住居跡より新しく、第113・114・115号住居跡より古い。

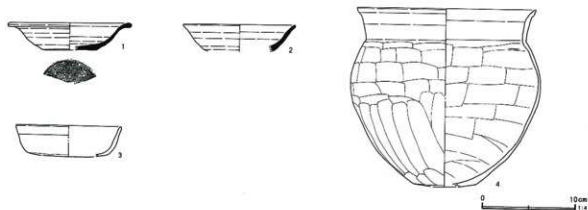
平面形は方形である。規模は長軸5.20m、短軸5.10m、深さ0.28mである。主軸方向は、N-99°-Eを指す。

第113号住居跡が重複しているため、床面の状況はよくわからない。壁溝はカマドの右側は通っているが、左側はないようである。ピットは第113号住居跡の壁溝に切られて2基確認された。カマド左側の壁際に床下土塊が検出された。

カマドは東壁のやや南寄りに造られていた。燃烧部は土塊状に掘り込まれ、先端は傾斜して煙道状に



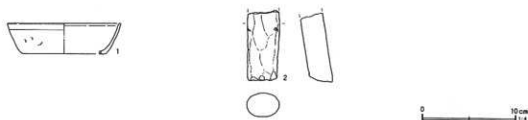
第126图 第117·122号住居跡



第127図 第117号住居跡出土遺物

第98表 第117号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	(13.2)	2.8	(6.0)	ABEH	普通	にぶい褐	30	
2	須恵器 坏	(12.0)	(2.8)	—	EHJ	良好	黄灰	30	貯穴
3	土師器 坏	(13.0)	3.3	(8.6)	BDEH	普通	橙	20	壁溝 備考 磨耗著しい
4	土師器 甕	(19.0)	18.9	6.5	ABDEH	普通	にぶい褐	40	貯穴



第128図 第122号住居跡出土遺物

第99表 第122号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 坏	(12.0)	3.2	(9.0)	BEH	普通	にぶい橙	10	壁溝
2	土師器 脚付土器	長(7.3)cm	重径2.4-3.4cm		BDEH	普通	にぶい褐	100	壁溝 脚部破片 中実

突出している。火床面は床面よりわずかに低い程度である。灰層や天井崩落土が顕著に認められた。袖は確認されなかった。

遺物は少なく土師器の坏と須恵器の坏が出土した。また、第113号住居跡の壁溝に切られているビットとその脇からは編物石がまとめて出土した。出土状況は、本住居跡の南壁際にかたまっており、第113号住居跡の壁溝に切られた部分は、編物石が取り除かれたようにきれいになくなっていった。時期は8世紀前半である。

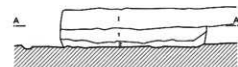
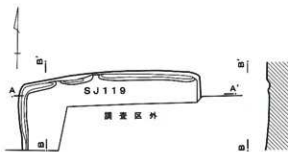
第110号住居跡 (第112図)

調査区の北東側、U-58、V-58グリッドに位置する。第103号住居跡と重複関係にあり、第103号住居跡は本住居跡を拡張したものである。

平面形は長方形と思われる。規模は長軸3.32m、短軸3.08m、深さ0.02mである。主軸方向は、N-97°-Eを指す。

床面は平坦で、壁溝はなかった。ビットは1基検出された。床下土壌は2基検出された。いずれも隅丸長方形を呈し、埋め戻されていた。

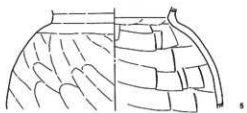
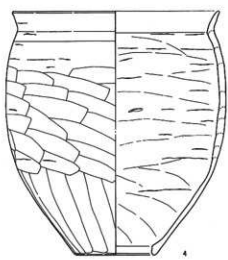
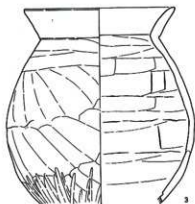
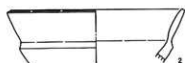
カマドは検出されなかった。第103号住居跡のカマドがそっくり重複しているものと考えられる。



第119号住居跡

- 1 障彩色土 赤土層、ローム・焼土・灰化物・パミス多量
 1 障彩色土 障彩色土・高橋赤土・焼土粒子・小ブロック多量、ローム粒少量
 2 障彩色土 障彩色土・ロームブロック・粒子多量、焼土粒・灰化物少量

断面縮尺=1/20 0 2m

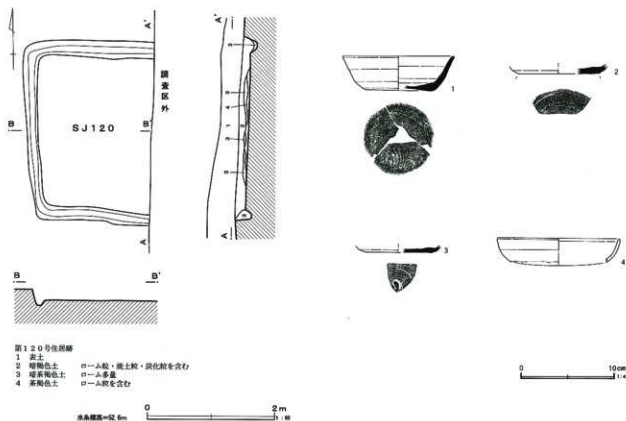


0 10cm

第129図 第119号住居跡・出土遺物

第100表 第119号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	土師器 高坏	(17.0)	(3.8)	—	ABEH	不良	橙	20	内外面磨耗著しい
2	土師器 壺	(18.4)	(5.7)	—	ABDEH	普通	橙	15	
3	土師器 甕	(16.0)	(20.5)	—	ABDEH	普通	にぶい赤褐	30	やや歪み有り
4	土師器 甗	(22.0)	25.4	(8.0)	ABDEH	普通	にぶい赤褐	40	
5	土師器 甕	—	(10.5)	—	ABEHJ	普通	にぶい赤褐	20	頸部径約13cm
6	土師器 甕	—	(3.3)	(8.6)	BEHJ	普通	明赤褐	15	



第130図 第120号住居跡・出土遺物

第101表 第120号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率(%)	備考・出土位置
1	須恵器 坏	11.8	3.7	7.0	EHU	普通	灰白	85	No. 1
2	須恵器 坏	—	(1.0)	(8.8)	EHU	良好	灰白	15	
3	須恵器 坏	—	(0.8)	(7.0)	EH	良好	灰	10	
4	土師器 坏	(13.0)	(2.5)	—	ADEH	普通	にぶい赤褐	15	

貯蔵穴と思われる土壌の掘り込みが南東隅に検出された。大きさは96cm×90cmで、深さは32cmであった。

遺物は、土師器の甕、須恵器坏などが出土したが、第103号住居跡の遺物が混入している可能性もある。第113図1はこの中では古く、本住居跡に伴うものと考えられる。時期は、第103号住居跡が本住居跡を拡張していると考えているので9世紀後半としておく。

第111号住居跡 (第99図)

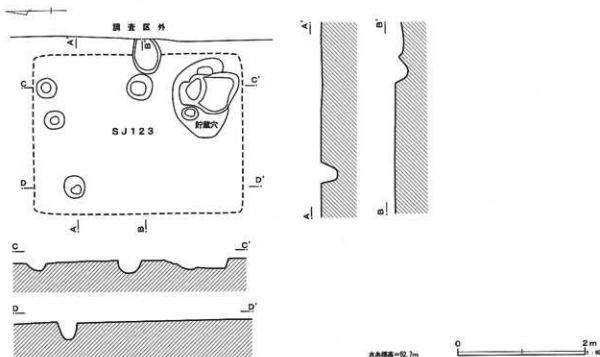
調査区の中央、X-51・52グリッドに位置する。第89・118号住居跡、第9号掘立柱建物跡と重複関

係にある。第118号住居跡よりは新しいが、他の遺構との新旧関係はつかめなかった。住居跡の北側半分は調査区外に出る。

平面形は不明である。長方形であろうか。規模は東西方向が2.5m、南北方向は1.65m検出された。深さは0.08mである。主軸方向は、N-88°-Eを指す。

床面は平坦で、壁溝はなかった。ピットは検出されなかった。

カマドは東壁に造られていた。燃焼部は壁外に突出しているが下には掘り込まれていない。覆土にはロームブロックが多量含まれており、埋め戻された可能性がある。袖は確認されなかった。



第131図 第123号住居跡

遺物は、カマドから土師器の坏と須恵器高台付坏が出土した。いずれも伏せられた状態であった。

時期は9世紀後半である。

第112号住居跡（第122図）

調査区の中央、X-52、Y-52グリッドに位置する。第87・89号住居跡、第9号掘立柱建物跡、第104・105・107号土壇と重複関係にあり、本住居跡が最も古い。

平面形は長方形である。規模は長軸4.12m、短軸3.38mである。主軸方向は、N-88°-Eを指す。

かなり削平されており、貼床まで出ていたため床面の状態は明らかでない。壁溝は検出されなかった。ピットはカマドの反対側に1基検出された。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、壁外に突出している。掘り方は浅く埋めており、火床面は床面より低かったようである。袖は確認されなかった。

遺物は、ほとんど出土しなかったが、須恵器の坏が図示できたものである。時期は9～10世紀として

おきたい。

第113号住居跡（第119図）

調査区の北東側、U-57・58、V-57・58グリッドに位置する。第108・109・114・115・328号住居跡と重複関係にある。第108・109・121号住居跡より新しく、第114・115号住居跡より古い。

平面形は長方形である。規模は長軸4.86m、短軸4.30m、深さ0.28mである。主軸方向は、N-12°-Eを指す。

床面は平坦で、壁溝はほぼ全周する。ピットは3基検出されたが柱穴とは断定できなかった。

カマドは北壁のやや東寄りに造られていた。燃焼部は土壇状に掘り込まれ、煙道は段を持って壁外に突出している。掘り方を埋めて火床面は床面と同じ高さにしている。灰層が残り天井崩落土が認められた。袖は両袖とも残っていたが、白色粘土を混ぜて構築されていた。

遺物は、土師器の坏・甕が出土した。甕はカマドの前面からの出土である。時期は8世紀中葉である

うか。

第114号住居跡 (第123図)

調査区の北東側、U-57・58グリッドに位置する。第113・115号住居跡と重複関係にあり、いずれよりも新しい。

平面形は方形である。規模は長軸3.20m、短軸3.10m、深さ0.12mである。主軸方向は、N-110°-Eを指す。

床面は平坦で、壁溝は全周する。ピットは検出されなかった。住居跡中央に40cmほどの範囲で焼土が検出された。

カマドは東壁の南寄りに造られていた。燃焼部は壁外に浅い土壇状に掘り込まれている。掘り方を埋め戻して火床面は床面より高く設定されている。焼土化した天井崩落土や灰層がきれいに残っていた。袖は検出されなかった。

遺物は、カマドの周囲を中心に土師器の坏・甕、須恵器坏などが出土した。3は混入である。

時期は8世紀中葉～後半と考えられる。

第115号住居跡 (第123図)

調査区の北東側、U-57・58グリッドに位置する。第113・114・328号住居跡、第119・121号土壇と重複関係にある。第114号住居跡、第119・121号土壇よりも古く、他の住居跡より新しい。東側は第114号住居跡によって壊されている。

平面形は長方形である。規模は長軸4.2mほどと推定され、短軸は3.24mである。深さ0.03mである。主軸方向は、N-98°-Eを指す。

床面はほぼ平坦で、壁溝は全周するようである。ピットは土壇状のものも含めて3基検出されたが柱穴と断定できるものはなかった。

カマドは検出されなかった。第114号住居跡が重複している東側の壁に造られていたと考えられる。

遺物は、時期を推定できる遺物はないが、重複関係から8世紀中葉～後半と考えておきたい。

第116号住居跡 (第125図)

調査区の北東側、T-57・58、U-57・58グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。遺構の北側の大半は調査区外に出る。

住居跡の南西部分が三角形に検出されただけであるため、平面形は不明である。検出された部分は西壁が2.26m、南壁は4.26mである。深さは8cmである。主軸方向は、東西方向でN-89°-Wを指す。

床面は平坦で、壁溝は検出された範囲ですべて廻っている。ピットなどは検出されなかった。

カマドは検出されていない。調査区外の東壁あるいは北壁に設置されていると考えられる。

遺物は、土師器の坏・甕が出土した。

時期は、小破片を復原しているが8世紀初頭～前半と考えられる。

第117号住居跡 (第126図)

調査区の中央、Z-50グリッドに位置する。第99・100・122・128号住居跡と重複関係にあり、第99・100号住居跡より古く、第122号住居跡より新しい。

平面形は長方形である。規模は長軸5.74m、短軸4.64m、深さ0.09mである。主軸方向は、N-89°-Eを指す。

住居跡のほとんどに第99号住居跡が重複しているため、床面などの状況は不明である。壁溝は第99号住居跡によって破壊を免れた部分には見られることからほぼ全周していたと考えられる。ピットは検出されなかった。

カマドは東壁に造られていた。カマドも第99号住居跡が半分重複していたため残りがよくない。燃焼部は土壇状に掘り込まれているが、壁内に取まっている。袖は左袖だけが確認されたが、袖の先端は第99号住居跡によって切られていた。

遺物は、わずかであるが土師器の坏・甕、須恵器の坏が出土した。4の甕は器壁が薄く口縁は「コ」字状を呈している。

時期は9世紀前半と考えられる。

第119号住居跡 (第129図)

調査区の中央、Z-51グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。南側の大半は調査区外に出る。

平面形は不明である。検出されたのは北辺が2.9m、西辺は1.05mである。深さは確認面から4cmほどになってしまったが、調査区の断面で確認すると約30cmまでは立ち上がりが見られる。主軸方向は、北壁でN-86°-Eを指す。

床面は平坦で、壁溝は所々切れている。ピットは検出されなかった。

カマドは検出されなかった。調査区外の東壁に設置されていると考えられる。

遺物は、土師器高坏・甕・甔などが出土した。1は混入であろう。

時期は6世紀前半である。

第120号住居跡 (第130図)

調査区の北側、P-58、Q-58グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。住居跡の東半分は調査区外に出る。

平面形は不明である。検出された規模は、西辺が2.90m、北辺は2.06mである。深さは0.07mである。主軸方向は北辺で測ると、N-90°-Eを指す。

床面は平坦で、壁溝は全周するようである。ピットは検出されなかった。

カマドは検出されなかった。調査区外の東壁にあると思われる。

遺物は、土師器坏、須恵器坏が出土した。

時期は幅を持たせて8世紀後半～9世紀前半としておく。

第121号住居跡 (第118図)

調査区の北東側、U-57、V-57グリッドに位置する。第108号住居跡と重複関係にある。第108号住居跡は本住居跡を拡張したものである。

平面形は長方形である。規模は長軸4.74m、短軸3.18mである。主軸方向は、N-107°-Eを指す。

第108号住居跡は床面まで削平されていたが、残っていた貼土をはがしたところ、北壁の内側に壁溝が検出され拡張されたものであることがわかった。ピットはカマドの反対側の西壁際に検出された。2基のうち南側のピットが本住居跡に伴うと考えられる。

カマドは検出されなかったが、第108号住居跡のカマドが重複していると考えられる。

遺物は、土師器の甕の底部破片が本住居跡から出土している。

時期を推定できる遺物はないが第108号住居跡が8世紀前半とするならばそれに先行する近い時期となる。

第122号住居跡 (第126図)

調査区の中央、Z-50グリッドに位置する。第99・100・117・128号住居跡と重複関係にあり、第99・100・122号住居跡より古い。

平面形は不明である。住居跡の大半は第117号住居跡などが重複しているため残っていない。検出されたのは南北方向が3.36m、東西方向は0.7mにすぎない。主軸方向は、N-82°-Eを指す。

床面などの状況は不明である。壁溝はカマドの左側には見られるが、右側には検出されなかった。

カマドは東壁の北寄りに造られていた。燃焼部は壁内に収まるようである。袖は両袖とも確認されたが先端は第117号住居跡が重複しているため、削られていた。

遺物は、土師器の坏と土器の脚部と思われる製品が出土した。

時期は、重複する第99・117号住居跡と遺物の上ではあまり時期差は感じられないが、重複関係から9世紀前半以前となる。

第123号住居跡（第131図）

調査区の北側、R-58グリッドに位置する。他の遺構との重複関係はない。床面まで削られており、カマドと貯蔵穴が検出された。住居跡の範囲は貼床の範囲から推定した。カマド先端は調査区外に出る。

平面形は長方形と思われる。住居跡の規模は推定であるが南北方向が3.3m、東西方向は2.5mほどと考えられる。カマドの主軸方向はN-90°-Eを指す。

床面の状態などは不明である。ピットは複数検出されたが本住居跡に伴うかどうか断定できなかった。

カマドは東壁のやや南寄りと思われる所に造られていた。燃焼部は壁外に出ているようである。

貯蔵穴と考えられる掘り込みがカマド右脇に検出された。大きさは90cm×60cm、深さは16cmであった。

遺物は出土しなかった。

時期は不明である。